

原 著

## 職域における早食い、口腔内状態および メタボリックシンドローム発症との関連

横井 彩 江國 大輔 米田 俊樹 森田 学

**概要：**メタボリックシンドローム (Metabolic Syndrome: MetS) のリスク因子として早食いが挙げられる。また近年、MetSは歯の喪失やう蝕など口腔内状態との関連も注目されている。しかし、MetS、早食いおよび口腔内状態を総合的に検討した報告は少ない。そこで、本縦断研究は、職域における早食いおよび口腔内状態とMetS発症との関連について検討することを目的とした。対象者は、某事業所における平成24・27年度定期健診をどちらも受診した従業員のうち、平成24年度MetSに該当しなかった男性114名(36～63歳)を分析対象者とした。診査項目は、身長、体重、腹囲、血圧、空腹時血糖値、中性脂肪、HDLコレステロール値、口腔内状態、生活習慣(早食いの有無、食・運動・飲酒・喫煙習慣)とした。平成27年度健診結果から、MetS発症群と非発症群に分け、早食いの習慣および口腔内状態との関連を分析した。統計分析には $\chi^2$ 検定、Fisherの直接法およびMann-Whitney U検定を用いた。3年後にMetSを発症した者(16名)は、全員早食いの自覚があった。また、MetS発症において、早食いと腹囲異常による相加効果がみられた。結論として、早食い腹囲異常のある者はMetS発症のリスクが高いことがわかった。一方で、口腔内状態との直接的な関連はみられなかった。

索引用語：メタボリックシンドローム、早食い、職域

口腔衛生会誌 68：9-14, 2018

(受付：平成29年7月3日／受理：平成29年10月3日)

### 緒 言

メタボリックシンドローム (Metabolic Syndrome: MetS) は内臓脂肪の蓄積とインスリン抵抗性を背景として、動脈硬化性疾患の危険因子である肥満、高血圧、脂質代謝異常、糖代謝異常を病態とした症候群のことである<sup>1)</sup>。心筋梗塞、脳梗塞などの動脈硬化性疾患は日本人の死亡原因の上位を占めるため、MetSを予防することは喫緊の課題である<sup>2)</sup>。

MetSのリスク因子には、早食いなどの生活習慣がある<sup>3-5)</sup>。一方、近年の疫学調査では、MetS発症者は喪失歯やう蝕を有する者が多いといわれている<sup>6,7)</sup>。喪失歯が多いと、野菜など繊維質の食べ物に対し、咀嚼困難感を自覚しやすく、ご飯やお菓子など、噛みやすいものを摂取する傾向にある<sup>8)</sup>。食べ物を咀嚼する際、柔らかい食べ物ほど、咀嚼回数が少なく、咀嚼時間が短い<sup>9)</sup> こと

から、間接的に早食いを助長している可能性がある。しかし、MetSのリスク因子として、早食いと口腔内状態の両方を調べた報告は少ない。

MetSの予備群は、30代から40代にかけて増加し始める<sup>\*1)</sup>ため、MetSに関するさまざまな研究が、この年齢層を多く含む職域に焦点を当てている<sup>10,11)</sup>。一方、企業における定期健康診断の受診率が85.6% (事業所規模：従業員1,000～4,999人)<sup>\*2)</sup>であるのに対し、一年間で歯科健診を受診した者の割合は34.1% (平成21年)と低い<sup>\*1)</sup>。そのため、MetSと、早食い、口腔内状態を総合的に検討した報告は少ない。そこで、われわれは職域において、口腔内状態が悪く、早食いである者はMetSを発症しやすいという仮説を立てた。本縦断研究では、職域におけるMetS発症と早食い、および口腔内状態との関連について検討することを目的とした。

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科社会環境生命科学専攻予防歯科学分野

\*1 厚生労働省：平成26年版厚生労働白書～健康・予防元年～、<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/14/backdata/index.html> (2016年12月27日アクセス)。

\*2 厚生労働省：平成24年労働者健康状況調査、<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/h24-46-50.html> (2016年12月27日アクセス)。